

<共同研究報告> 「総合化された」雑誌におけるジェンダーの表象：『太陽』『家庭欄』をめぐって

著者	佐藤 バーバラ
雑誌名	日本研究：国際日本文化研究センター紀要
巻	17
ページ	273-283
発行年	1998-02-27
その他の言語のタイトル	The Representation of Gender in a 'Generalized' Magazine : The Family (Katei) Column in Taiyo
URL	http://doi.org/10.15055/00000764

〈共同研究報告〉

「総合化された」雑誌におけるジェンダーの表象

——『太陽』『家庭欄』をめぐって

佐藤バーバラ

一、はじめに

『太陽』は日本における最初の総合雑誌とされるが、『太陽』が総合雑誌であるゆえんは、『中央公論』や『改造』、あるいは戦後の『世界』とはいささか異なる側面がある。たとえば『中央公論』は、『太陽』に遅れること四年、明治三十二年（一八九九）に『反省雑誌』を改題し仏教主義的、徳目的色彩を払拭して、総合評論誌として再出発したものであったが、この場合用いられる「総合」には通常少なくとも二つの含意がある。第一に、人々が関心を抱く事柄全般をカバーするという「総合性」である

が、創刊当初の表紙に「政事・文学・教育・宗教・経済」と頭書きしたことに示されるように、実際はもっぱら精神文化のみにわたるものであった。⁽¹⁾ 第二に、『中央公論』は昭和初期に、「思いきった誌面の刷新（大衆化、多様化）が、大衆社会の不特定多数読者をひきつけ……労働派学者をふくむリベラルな論陣、プロレタリア作家などによる時代意識の反映、中間読物の発展など、総合誌としての面目を発揮」したと評されるように、特定の見解や立場にとらわれることのない中立性という意味での「総合性」である。いずれにしても、総合雑誌はもっぱら時事的問題の評論や論説、

あるいは創作を通じて、知識世界の様相を紹介し、しだいにその数を増しつつあった日本の知的読者層の要望に応えるものだった。⁽²⁾ つまり、一般的にいうと、総合雑誌という名称から直接示唆されるような、広範な読者層を対象に、多様なジャンルの記事を網羅的に掲載するだけのものではなかったのである。

一方、『中央公論』が誌名と内容を改めるにあたって明らかに参照したと思われる『太陽』は、さまざまな雑誌を統合したというその成り立ちから、より幅広い、多種多様な内容となった。『日本商業雑誌』、『日本農業雑誌』などにあった実務的記事

が、『太陽』にも「商業欄」、「農業欄」と

して受け継がれたのである。「知的志向」

という共通項で括られる後続の総合雑誌と

比較して、能業や相撲、生け花、茶道まで

も取り扱う『太陽』は、見方を変えれば雑

ばくな体裁の雑誌ということになるが、

「当時としては誠に驚嘆するの他なく、よ

く売れて、版を重ねたこともっともなこ

とである」と評されるのだった。⁽³⁾ 実際は各

欄の読者層がそれぞれ異なることになること

がなかったとしても、さまざまなジャンルを

包含するこのような総合雑誌の登場は、必

然的に多様な議論を多様な読者に呈示する

ことになる。『太陽』がそのまま一般世論

を形成する場だったと短絡的に断定はでき

ないが、少なくとも特定の読者を対象にし

た閉じられたそれまでの議論が何らかの影

響を受けたことは予想できよう。とりわけ、

女性向け雑誌は今なお世界中で普遍的であ

るなかで、十九世紀末の時点で女性雑誌を

統合した『太陽』は、継承先とみられる

「家庭欄」での議論をどのように展開した

だろうか。以下本稿では、「家庭欄」にお

ける「家庭」概念に関する記事を対象に、

ジェンダーの側面から雑誌の「総合化」の

意味と展開を検証してゆく。

二、「家庭欄」の登場

発行する雑誌を『太陽』一誌に集約し、

その代わりに大部でしかも廉価なものにす

るという、博文館の「一点豪華主義」は、

創刊当初から大きなセンセーションを巻き

起こし、営業戦略としてはみごとな成功を

おさめた。⁽⁴⁾ しかし、一方で多種多様な読者

層を包含することで、編集にも新たな工夫

が必要となった。そもそも、雑誌の統合が

時代の流れに逆行するのではないかという

危惧は、発刊の言葉において発行者自ら認

識していたことだった。

るべからざるは固より論を俟たず。然

るに今各種を集めて大成し、専門を合

して並陳し、以て相混載するに至って

は、或は文明世界分業の趣旨に背反す

るの感なきに非ず……（大橋新太郎

「太陽の発刊」、「太陽」第壹巻第壹号、

一八九五）

近代性の表象として階層や年齢、そして

性別によって人々が細かく分類、位置づけ

られ、その結果読者層もまたしだいに細分

化されてゆく傾向にあったのにたいし、そ

れに逆らって一種の雑誌だけで対応しよう

とすれば、出来る限り雑誌が総体として

興味あるものでなければならなかった。一

人の読者が雑誌の特定の部分だけしか興味

をもてないとしたら、分厚い『太陽』の外

見の立派さだけを誇ることに過ぎず、早晚

陳腐化し、雑誌購読の意欲を喪失すること

になるだろう。したがって「普く専門諸大

家の力を集め、広く中外諸人に紹介して以

て相互の智見を交換せしめんとする」（大

橋新太郎、「太陽の発刊」というように、異なる分野との情報の交流の意義を強調しなければならなかった。これを人文知識の総合を意図する啓蒙理念の表明であると単純に結論づけることはできないが、少なくとも『太陽』各欄の記事は、従前よりも多様な読者を想定したといつてよいだろう。とすれば、女性向けの雑誌『日本之女学』、『婦女雑誌』を引き継いだ「家庭欄」もまた、もっぱら女性向けだけのセクションだったということにはならなくなる。

博文館発行のすべての雑誌が『太陽』に統合されたわけではない。「読者愈々多ければ図書の価益々廉ならざる可からず」(大橋新太郎、「太陽の発刊」という営業戦略が基本ではあったが、子供向けの雑誌だけは「合併すべからざる『少年世界』」を別途に創刊することになった。関心も発達も異なる児童の読者に独自の雑誌が求められるのは自然なことであるが、そうした観点に立てば、ジェンダーも雑誌の基本性格を決定する重要な要因となるはずだった。

いわゆる女性雑誌は、現在に至るまで多くの部数を誇る、独自のメディアとして続いている。そして明治末期から大正初期にかけては、日本の女性雑誌の最初の黄金期だったといつてよい。一九〇六年(明治三九年)に創刊した実業之日本社の『婦人世界』は、一年たたないうちに毎号少なくとも二十万部を超える売り上げを誇り、引き続き生まれた『婦女界』、『主婦之友』も当初からそれぞれ十万単位で発行され、マスマガジンの資格を獲得した。この「女性雑誌ブーム」に先立つ十年前に、博文館は逆に自社の女性雑誌を、明らかに男性、それも当時まだ限定的だった中流以上の男性読者を対象とした諸雑誌と合併させ、「家庭欄」に受け継がせたのだった。

『太陽』の三十三年の歴史のうち、家庭欄が設けられたのは創刊から九年間に過ぎない。その体裁にも変遷があり、三年目には、叢談、礼式、家政、衛生、娯楽の各セクションに分類する試みが行われたが、四年目からは細かな分類はなされず、「家庭および

び叢談」、五年目にはたんに「家庭叢談」というタイトルとなった。つまり後半期には、「家庭欄」は文化に関する雑多なエッセーと一緒にされて、家庭についてのウエイトは軽くなったとみられる。ともあれ創刊の当初には、「家庭欄」は『太陽』のさまざまなジャンルの中で、どう位置づけられていたのだろうか。その頃の『太陽』は「論説」、「文苑」、「地理」といった各欄の見出しの下に、それぞれの欄の存在理由が説明されていたが、家庭欄では以下のような役割が謳われていた。

家を治むるは国を治むるより難し、割烹・調理・礼式・手芸・育児・衛生・行事・流行は大綱たり、乃其細目に涉りて懇到適切に之を記述し、家庭団樂の道を教へ、国民の品位風儀を増進せんとす。(「家庭欄趣旨」『太陽』第壹巻第壹号)

これが、発刊第三年目の明治三十年には

新たな文章にとってかわる。

世の文明に進むに随ひ、人事転た紛冗を極む、其の平静和楽別世界を為すもの、唯一の家庭あるのみ、況や子女の教養は尤も家庭の感化を重んず、本欄之が指南車たり。(『太陽』第参巻第九号)

『太陽』がたとえよせあつめの結果生まれた雑誌であるといっても、総合雑誌として出発した以上、『太陽』のもつ基本的な性格は家庭欄にもおのずと反映してくる。

二つの家庭欄の趣旨説明に共通しているのは、家庭を国家に結びつけることだった。家庭の意義は、国家の基本である国民を「品位」正しく、「風儀」豊かに養成することであり、よりすぐれた国民を作るという点で、家庭は国家に責任を負うことになる。いうまでもなく、国家を視点の中心にするのは、『太陽』だけでなくこの時期に共通の論調だったが、二つの趣旨説明を比較

すると、当初のものでは家庭の管理と国家の統治との類似が語られているのにたいし、新たに書き換えられたものでは、家庭の公的な世界にたいする私的な場、くつろぎの場という側面が明確にされている。ここでは家庭は必ずしも国家を構成する最小単位として位置づけられるのではなく、国家と密接に関連しつつも、国家やビジネスの公の世界とは質的に異なる、独立した世界と認識されている。そしてたしかにこの趣旨説明こそ「家庭欄」を読み解く示唆を与えてくれるのだ。

三、「家庭」の男性

この時期、「家庭」という言葉は社会的にまだじゅうぶん定着してはいなかった。「キリスト教的な夫婦関係中心のホーム」を踏まえた嚴本善治らの啓蒙的議論によって、ようやく一八九〇年代から「家庭」という言葉が一種の流行語になったとされる。徳富蘇峰が主筆となって一八九二年創刊された『家庭雑誌』とならび、『太陽』「家庭

欄」も、そうした潮流を踏まえたものだった。教育と文芸など女性の教養に重点がおかれた『女学雑誌』や、道徳やマナーを説いた『女鑑』など旧来の女性雑誌とくらべて、「家庭」を標榜することは雑誌の性格の違いを反映していた。それはつまり、夫婦と子供を構成員の核とする「家庭」が、女性だけではなく、男性もまた関心と責任を分担すべきものとされたことと関連する。『婦女雑誌』の読者を引き継いだとはいえ、明らかに読者の圧倒的多数が男性だった『太陽』が「家庭欄」を設けたのも、その意味でじゅうぶん理にかなったことだった。

実際、『太陽』はもっぱら男性の読者のものとみなされていた。読者層をうかがわせる一つの例として、「中将湯」の広告をあげておこう。医薬品は書籍とならんで草創期からメディア広告の中心を占めていたが、とりわけ一八九三年に婦人病のための万能薬を謳って津村順天堂から発売された「中将湯」は、商標の錦絵風美人をシンボ

ルとした広告を、第二次大戦後まで常時新聞雑誌の紙面に掲載していた。⁶⁾商品の性質上、基本的に「中将湯」の広告は女性読者を対象にしたものだったが、初期の『太陽』に掲載したものは他のものと宣伝コピーが異なっていた。一八九七年の『太陽』にのった広告の文面は次のようであった。

見よ、女と云ふ女、母を持てる子、妻を持てる夫、娘を持てる親、姉妹を持てる兄弟は繰り返し繰り返し此広告を読みたまへ。読みて記憶し玉へ。日本国に中将湯と云ふ靈藥あることを。……太陽之愛読者よ、諸君の知り先に於て若しも、子宮、血の道、さん前さん後の諸症にて、種々の薬を用ひても其効なく困難する人あれば、試みに此中将湯を服用せしめよ……百発百中。〔中将湯広告〕、『太陽』第四巻第拾八号

この広告では、『太陽』の読者自身が中

将湯を必要とし、使用するとは想定していない。最初の「女という女」という語を除き、それに続くのはすべて男性読者への語りかけである。少なくとも広告主からみれば、『太陽』に女性読者が多数いるとはみなしていなかった。結果としてこの広告は「家庭欄」の読まれ方と暗合してくる。家族を想定することで、『太陽』での婦人薬の宣伝を意味あるものとしたのである。

『太陽』の家庭欄にも、後の女性向けマスマガジンの家庭記事、実用記事などと同じ、料理や育児、衛生などの記述がある。しかしながら、十九世紀の終わりの時点でもっとも先進的だったのは、次のような「家庭」概念の紹介である。

独り家庭には人生最大の幸福ひそむのみならず、家族と共に事を遂ぐべきをもていみじき極端に流るることなし。然かも慈悲恩愛あるは忍耐等一切の徳行をみがく因縁となるべし。故に今日の如く人情日に薄く、さるに国運月に

煩はし時には家庭の觀念を國民に普からしめ、もて國家の元氣及び個人の幸福を増さしむるこそ急務なれ。蓋しおのれは家庭とは決して単に家屋若しくは家族につきて言ふにあらずかし。……苟も家庭といふには左の如き条項を備ふべきなり。(三輪田真佐子「家庭の觀念」、『太陽』第貳卷第九号)

記事はさらに家庭が家庭であるための条件として三つの項目をあげる。第一に、家族が共通の主義をもつこと、この場合の主義とは、信仰、モラルをふくむさまざまな行動の指針を意味しよう。第二は、和楽、これは快楽とはほほ同じ意味とみられるが、筆者は家庭は精神的快楽をもたらすものでなければならぬとする。つまり、家族の間の愛情が家庭には不可欠となる。第三は、家風で、人にそれぞれ気質があるように家庭にはそれぞれの習慣があり、それにもとづく家風が形成されねばならないとする。ただ、家風はすべからく高尚、かつ勤勉で

節約につとめるという。

家庭のためのこうした条件は、本来家族のひとりひとりと関連してくるものだが、当時のジェンダー間の力関係を考えれば、やはり男性が一家の中心的地位を占め、家庭の主義や家風などの責任が帰せられるのが必然的な帰結だった。『太陽』の家庭欄が、そのタイトルに忠実に、家庭のという新たな論点を取り上げることは、そのまま多くの男性を重要な読み手として包含することになったのである。たとえば、書齋が家族の形成に重い意味をもつと説く次のような文章でも、家庭という場での男性の責務を示唆する。

予は一軒の家には必ず「一の書齋あるべし」といふを家庭の憲法としたい。予は平生、家庭といふ一つの団体が、一処になって、即ち主人、主婦乃至子供諸共前にいふた書齋に集まりて、一つの書物を読んでこれを考へ、知識智恵の交換をなすことにしたく、……

（櫻井鷗村「家庭の読書」、「太陽」第式巻第九号）

この提案をした桜井鷗村は、津田梅子とともに津田塾を設立した人物で、『女学雑誌』などで女性の教育、生活などについて積極的な発言を行っていた。『近事評論』、『家庭叢談』など一八七〇年代の雑誌では、男性の家庭、家事への関与が説かれていたのにたいし、一八九〇年代後半ともなると、家庭を女性が存在する場所に固定する観念が形成されはじめ、それとともに総合雑誌から家庭・家族関係の記事が姿を消すようになったとされる。⁽⁷⁾ 家庭という概念の成立は、家事や育児をジェンダーロールとして固定し、女性を家庭にとじこめることになったのである。社会のこうした動向から一歩出遅れて始まった『太陽』の家庭論議は、そのためにかえって新たな要素をその家庭像につけ加えることになった。桜井が描く家庭においては、女性がその役割を限定されるより、むしろその居場所である台所か

ら書齋へと引き出されようとしている。読書という行為は、家庭の団欒を実現させるが、家族が夫、妻、子どもの絆のために一冊の書物の内容を共有しようとすれば、それを朗読するのは当然ながら夫の役割だった。

書齋が家族の形成と関連するならば、や後に出現する文化住宅にも新たな解釈を加えることができる。文化住宅には二通りの定義があり、ひとつは洋風の個人向け小住宅を指し、もうひとつは和洋折衷の住宅を指すものだが、後者は通常、和風玄関のよこに外見も内装も洋風にした部屋を付設する。この部屋は、和風の客間を西洋化し、洋室の応接間としたものと説明されているが、多くの場合立派な書棚を備える洋風の応接間は書齋ともなった。⁽⁸⁾ そして桜井の主張を参照すれば、それは必ずしも来客のためばかりではなく、新たに形成される家族が集う象徴的な場ということになる。いわゆる茶の間が、もっと情緒的で、血のつながりによる家族の場所だとすれば、書齋は、

合理的で、文化的なまとまりとしての家庭のためのシンボリック空間でもあったと位置づけられよう。一八九〇年代の家庭という概念への関心の高まりは、こうして次の世代には、上層中流クラスの住宅に具現化されたのだった。しかしながら、家庭にふさわしい外見の家が実際に出現したとしても、内部に住まう人々の間で、家庭についての新たな観念について、容易に合意に達するとは限らない。家庭の観念が浸透する際に直面した困難は、『太陽』『家庭欄』を通じても察せられる。

四、女性教育と「家庭」

日清戦争後の時期にかけて、家庭をめぐってとくに問題となったのは、学校出の女性の結婚後の生活だった。この時期、女学校を卒業する女性は、飛躍的に数を増したが、彼女たちは、それまでの女性と価値観、行動様式を異にする新世代の女性だった。新しい教育を受けた女性たちは、家庭を形成してゆく中核となる存在であるはずだっ

たが、現実には、次の引用にみられるように、堅固な生活習慣が壁として行手をはばんでいたのである。

貴と無く、賤となく、都も、其ほどほどに、女子が為に設立せらるる、学校の数も、日に月に、多くなり行く、最と嬉しき事なり。……昨日までは、学びの園に、花をもてあそびし少女子も、今日は、若草のつま持たる婦人となりて、うひうひしき家族に、馴れぬ家政を執るにこそあれ。さても、学校に在りし日は、板の間に、机腰掛並べて坐はり、あらかなる開き戸、開けたてして、知らず知らず、無雑作に拳動し人が、なほ、有りしながらに、畳の上に、褥打ち敷き、天保時代をそのままに、女子は、しきみをこゆ可からずてふ教へを、唯一の金言と心得て、物むつかしげに眉根寄せつつ在する、舅、姑の前に、三つ指つく身の窮屈さ。
(敲玉女史「姑母と少婦と」、『太陽』第

四巻第壹号)

この記事では、家族、家庭、両方にホームとふりがながついていて、新たな理念として総合雑誌や女性雑誌で語られてきた家庭は、実際はまだはるかに遠い存在にすぎなかったことがみてとれる。それまでの女性が得られなかったような自由な時間を学校で過ごし、新しい知識を身につけた女性も、結婚すれば、新しい家庭をつくるどころか、舅、姑につかえる、まったく昔ながらの生活が待っている現実に直面することになるのだった。反対に親の世代の眼からは、私生活の空間を支配してきたこれまでの秩序に、女学校を出たような女性は適合しえないということになる。次の引用は、そうした見方を示すものである。

今の世は、新旧のつぎ合せ目にて、何によらず、むづかしきものぞと云ふ事を、みなが、能く能く心得たきものなり。されど、其れは、老いたる人の心

用ひを、いささか促がしたるにて、又、若き女子たちに向ひても、亦、云はで協はぬことあり。当世の新婦は、疑ひも無く、辛抱弱くなりたり。決して、そのかみの女子の如く、堅忍の力を養ふに乏し。そのうへ、母が不馴れの、(勿論、最早、当時の教育を受けたる人も、やうやう、母と呼ばれるに至れるもあれども)学校教育は知らず知らず、息女を驕らしめて、覚えず、我儘にせしむるの弊を免がれず、ここに於てか、家に在りて、通学する間は、従来の少女と違ひて、ことに、家政の事を見ならはしむること少なく、俄にしてい、他の家の嫁するに及びては、一切すべて、不調法不器用なるに、さて、理屈といふことは、存外にわかりて、長者、即ち、良人、舅姑の云ふことも、其れは不理なり、彼れは、不当なりと、あやにくに、見分くるだけの目はありて、これを抑ふる忍耐力は、甚だ、そのかみに比して、弱しとすれば、勢ひ、

紛々の起るも、余儀無き次第ならずや。
(ひさこ)「処世諷刺」、『太陽』第四卷第拾八号⁽⁹⁾

時代の変わり目に新世代のものが旧世代から批判を受けるのはよくあることとしながらも、ここでの批判は、もっぱら学校教育をうけた若い女性の方に向けられる。同じ筆者の別の記事によると、当時、女学校を卒業した女性には、話し方や文章が男っぽい、あるいは、なまいきであるというような評判があったというが、たとえば、のちに女学生のシンボルとなる袴の着用も、当初は彼女たちの自由奔放さを示すものとして、大きな論議を巻き起こしたのだった⁽¹⁰⁾。さらにこの時期、女子教育に対する社会一般の見方が、一時的に冷ややかになっていったことも、女子学生にきわめて批判的なこの記事が背景にある。たとえば、一八九一年(明治二四年)の『国民之友』は、女学校での女子教育がいかに現実の生活から遊離しているかを指摘しているが、『太陽』

のこの記事もそれに呼応するような内容となっている⁽¹¹⁾。明治政府の描く上下秩序が明確に定められた「伝統的」家族像と、女子教育のめざす方向との食い違いが、こうした批判を巻き起こし、教育をうけた女性たちは、公定の家族関係におさまりきらない、「驕り」「我儘」な者とされたのだった。このような風潮の下で、女子教育の側が必ずしも全面的に屈服しなければならなかったわけではない。学校教育と私生活空間の双方がそれぞれ譲り合った結果が、女学校における良妻賢母教育への傾斜であり、また、私生活における家庭の概念の登場だった。次の記事は、そうした双方の妥協のプロセスをよく示している。

姑母などの「御身は、学校を卒へしとや。斯許のことは、為し得らるべしと思ひしを、」など云ひ、又は、「其れが、今の教育と云ふものにや、さても、怪しき事哉。わが身若かりし時は、かくぞ」など、云はれ、夫、將た、反対に、

「左許りのこと、今時の者が解せずとは如何。其程の事は、自ら、断行し、得らるべきを」なども云はるかし。：少女が学校に於て学べる所の、大いに、其実地と相ひ離隔したるを覚えて、失望不満の感あるべきを云ひ、以て、其考への、なほ思ひ過れる所あることを指点せんとす。……女子が、其学校に、業を修むる時は、家政、即ち裁縫料理等の学科技芸を好む者は少なく、否寧ろ有望の生徒は、それを好まずして、必ず、文学、歴史等の若き、高尚の学科を好む者なり。これ、実に、道理、人情の、然らしむる所、また、決して、甚だ無理ならざる也。故に、其教ふる人、学ぶ人、能く、其自らを省み、又他を戒めて、常に其女子たる事を忘れざらしむるにあり。単へに、ただ女子の天職を知り、女子の責務を考へしむべし。……凡そ、女子が国家の爲めに、大功を立つことは、陽に行ふことよりも、寧ろ、陰に行ふ業に在

り。其夫を助け、其子女を教へ、又、其家政を整頓、節約する。また、決して小々に非るなり。（敲玉女史「母儀たるべき人の心得」、『太陽』第四卷第六号）

学校教育で得た知識は、実際の家庭生活ではなんの意味もないと、姑は馬鹿にするものの、嫁にしてみれば、むしろそうした勉強の方に本来興味や関心がそえられるのであって、「女子の天職」として良妻賢母の責務を引き受けるのは、妥協をはかったのにすぎない。しかしながら、家庭の場そのものも変化しつつあり、妻が夫と完全に対等であるには程遠いかもしれないが、夫は妻にある程度の自主性を許すべきだし、また期待すべきだとの見方が支持されてきた。家を基礎とする親の世代にたいし、消極的な妻に満足できないような夫婦の関係こそ、家庭の理念が現実のものとなってゆく出発点だった。

五、おわりに

『太陽』の家庭欄の執筆者には、男性も女性もいたが、教育をうけた女性が結婚後に直面する問題を指摘したのは、いずれも女性の手によるものだった。男性が家庭の理念や時代と関連を説きがちだったのにくらべ、女性はいより身近な現実を見据えることを意識的に自らの守備範囲としたことは、次の文に表明されている。

ひさごは、なるべく、女子の上に就きたること、社会風教の上に関したことをこそ云はめ、政治などの上に就きては、よし、腹ふくるるわざありとも、云はじ語らじと思ひつれども……（ひさご「処世諷刺」、『太陽』第四卷第拾三号）

天下国家を論じるよりも、なるべく視線を周辺に集中することで、彼女は家庭の実際に形成されて行くプロセスを、そこで生

まれる問題とともに明らかにした。ただ、語りかける相手は女性読者とは限らない。むしろ、女子教育の問題を訴え、また、男性の方の意識の変革を多少なりとも示唆していることをみれば、語りかける対象はむしろ男性読者が中心だったとさえいえる。実際、家庭文化をつくり、一家団欒を実現するためには、男性も大きな責任を負うはずだった。加藤弘之もそうした責務を承認している。

夫婦の間の和せぬのも随分多い。其の和せぬのも女房の外に妾があるとか、家に妾はなくとも余所にあるとか、親爺が誠に酒を飲みて不行跡であるとか、酒を飲めば芸者の様なものを呼んで来て、さういふ者を相手にして騒ぐとか、或は貴顕紳士と云はるる立派な人が寄って弄花をするとか云ふ様な事がある。……母親は善い母親にして子供の将来を祈って、家庭の教育を嚴重にして立派にしやうと思ふても、家の親爺の風

俗が今日言語道断であると云ふ様な事では、今日不言の教は出来るものではない。(加藤弘之「家庭の改良」、『太陽』第五卷第七号)

それまで、めかけや愛人をつくったり酒やばくちにおぼれるなど、家庭の形成の障害となるのは、もっぱら男性の行為だった。この記事は、「家庭欄」ではなく「論説欄」に掲載されているが、それは加藤弘之が当時の第一級の知識人とみなされていたための待遇だろう。それはともかく、「家庭欄」の中心の主題だったといつてよい、新たな家庭概念についてのさまざまな議論は、男性読者を重要な読者層と想定していたのだ

った。ただ反面、それは、多くの女性読者が興味をもつ他のさまざまな記事や読み物、たとえば家事、衛生、教育、あるいは上流・有名女性の情報などが充分盛り込まれないという結果をもたらした。すでに雑誌読者層の重要な部分を占め始めていた女性のために、博文館は新たに一九〇一年(明

治三四年)に『女学世界』を創刊し、『太陽』『家庭欄』はその二年後の一九〇三年に消え去ることになった。そして、一九〇五年には、『女学世界』を発行部数であつという間に抜き去り、二十万部という売り上げを誇る、実業之日本社の『婦人世界』が登場し、女性読者との感情的一体感を売り物にする、女性マスメガジン時代が到来することになる。

注

- (1) 『中央公論社七十年史』(中央公論社、一九五五)、六二頁。
- (2) 尾崎秀樹『書物の運命』(出版ニュース社、一九九二)、二二〇―二二頁。
- (3) 小川菊松『日本出版界のあゆみ』(誠文堂新光社、一九六二)、四二頁。
- (4) 大和田茂『『太陽』創刊号の反響』、『日本研究』第二三集、九〇―九二頁。
- (5) 西川祐子『住まいの変遷と「家庭」の成立』、女性史総合研究会編『日本女性生活史』第四卷(東京大学出版会、一

九九〇、三〇一頁。

(6) 瀬木博信編『広告六十年』(博報堂、一九五五)、五一―五二頁。

(7) 牟田和恵『戦略としての家族―近代日本の国民国家形成と女性』(新曜社、一九九六)、六二―六四頁。

(8) 平井聖『住生活史』(放送大学教育振興会、一九八九)、一八九頁。

(9) この「ひさご」というペンネームを名乗るのは、次の述懐から分かるように、花圃女史の号でも執筆していた、三宅雪嶺の妻の三宅龍子である。《私の号の花圃というのも、花蹊(跡見花蹊―引用者注)にちなんだものでございますが、

「女学雑誌」などによく使いました。ひさご女史といふ号も、千代瀧といふ先生のお姉さんが、「これはあなたのことですよ」とおっしゃって、「ぶらぶら暮らすやうでもへうたんの胸のあたりに締めくくりあり」といふ歌を短冊に書いて下さったのを、そのままいただいたのでございます。》(神崎清『現代婦人伝』、中央公論社、一九四〇、八四頁)

(10) 女学生に袴と靴を着用させるよう規定したのは、一八八五年(明治十八年)

に開設された華族女学校で、下田歌子の発案とされる。『実践女子学園八十年史』、実践女子学園、一九八一、三〇頁)しかし、一九〇〇年(明治三十三年)になっても、宇都宮高等女学校では、袴を着けて登校した生徒に対し、「若シコノ際彼等ノ欲望を満足セシメバ他日の訓育上ニモ影響尠カラザルベシ」という意見が職員から出されたという。(唐沢富太郎『女子学生の歴史』、木耳社、一九七九、一四〇―四一頁)

(11) 唐沢富太郎『学生の歴史』(創文社、一九五五)、一二二―一二三頁。